

〈講演〉

マルチトゥーリ『マックス・ハーフェラー、  
もしくはオランダ商事会社のコーヒー競売』とその時代  
— オランダ近代史の光と影 —

石坂昭雄

1. はじめに

オランダ映画は、ドキュメンタリー・フィルムを除けば、わが国では滅多にご覧になる機会がないことと思いますが、本日上映いたしますこの映画は、オランダ文学のなかでは世界的に名高い作品を、舞台となったインドネシアとの合作でようやく映画化したものです。しかしこの作品をご理解いただくためには、どうしても原作の歴史的背景をご説明しなければなりませんので、少しお時間を割かせていただきます。

改めて申すまでもなく、わが国とオランダとは、まことに因縁浅からぬものがあり、かつて江戸時代には、オランダの長崎・出島がヨーロッパ諸国のなかで唯一貿易を許され、ヨーロッパの文化を伝えてくれる窓口で、この文化的交流はわが国にとって大きな文化遺産を授けてくれました。もちろん、この国が独立直後から、ヨーロッパ随一の中継商業国家＝海上帝国として彗星のごとく勃興したこと、そして、一七世紀末以降は、まさにそれゆえに最初の工業国家イギリスに、あるいはフランスに追い抜かれ、わが国の幕末開港当時は、まさに落日の旧海上帝国であったことは誰も歴史で学んで周知のところだと思います。それでも、明治になってからも、その時代のヨーロッパやアメリカの反カトリック的＝文化闘争的雰囲気の影響、あるいは、ゲーテやシラー、ベートーヴェンの作品を通じて、オランダは信仰と国の自由を守るため、太陽の沈むことがなかった世界最強の帝国スペインと戦って独立を果たした国、レンブラントやフェルメールの絵画——現在もお、展覧会のたびに人気を集めています——で名高い黄金時代の独自の市民的文化を生み出し、あるいは嘗々と国土を水から守ってきた勤勉な国民という像がいろいろのルートで植えつけられてきました。そしてまた今日では、世界に開かれた寛容な社会、その社会

保障やワークシェアリングでも模範とされて、おおむねプラスのイメージで受け止められてまいりました。

しかし、まさにこうした歴史の光の側面の裏に、すでに建国の時代から、オランダはもうひとつの顔を具えておりました。それがその植民地、とりわけインドネシア、かつてのオランダ領東インド（略して蘭印と呼ばれましたが）の支配と搾取です。

## 2. オランダの再出発と植民地体制

ところで、かつては、ヨーロッパ随一の世界的海上帝国、そして世界商業の覇者に上りましたオランダですが、18世紀末には見る影もなく凋落し、フランス革命やナポレオン戦争の時代の激浪に呑み込まれて、本国はフランスの衛星国（バタヴィア共和国、ついでナポレオンの弟ルイを国王に戴くオランダ王国）となり、ついには、1810年から、フランス帝国に併合され、他方でその植民地はすべてイギリスに占領されるという、亡国の悲哀を味わったほどです。しかし、1815年ウィーン会議で、オランダは、フランスにたいする防壁として、ベルギーやルクセンブルクをも併せて、新しくネーデルラント王国（かつての連邦共和制を廃止して単一国家）として再出発します。そしてその支えとして、イギリスは、一旦占領した、ジャワを含む旧オランダ植民地を返還します。（ただし、セイロン島＝現在のスリランカと南アフリカのケープ植民地やインド大陸での拠点は手放しませんでした）そして、1824年のロンドン条約で、イギリスとマラッカとスマトラの一部を交換して、相互の植民地の勢力圏を確定しました。

しかし、この新国家は前途多難で、早くも1830年にはベルギーが叛旗を翻して独立し、植民地でも大規模な反乱を招き、オランダの国家財政も経済ももはや破綻寸前となりました。そのなかで、オランダはなりふり構わず、植民地から収奪で自国の財政、そして経済復興をなしとげようとしています。

### 2.1. 領土支配体制——中央＝地方行財政・軍事体制——

そこで取られた方策のうち、まず、第一が植民地を商業拠点だけでなく領土支配に移行させ、保護領ではなく直轄統治とすることで、総督のもと中央の統治機構が設けられ、これを支える軍事力として植民地独自の、約二万の東インド陸軍——その兵士の6割は現地人で構成されて将校や一部の下士官だけが白人ですが——それと独自の艦隊が置かれます。そして、徴税や裁判や警察・裁判を含めた地方行政は、理事州、県、郡、副

郡に分けられ、理事州にはオランダ人の理事官 *resident* とそのスタッフを置きますが、県以下では征服された在地の貴族や有力者をその部下ともども県長（レヘント *regent*, *bupati*）や郡長（*districthoofd*, ドゥマン *demandang*）、副郡長（*assistent-districthoofd*, *assistent-demandang*）など有給（一部には職田 *ambtveld* とよばれる土地給付を残す）の地方官として抱え込むわけです。彼らを実質的に指揮監督するのがオランダ人の県の副理事官 *assistant-resident*、その下の郡の監督官 *contrôleur*、副郡では監督官補 *aspirant-contrôleur* です。こうしてオランダは、第一次世界大戦までにイギリスなど他の列強との摩擦を避けながら、支配をジャワ以外のいわゆる外島に拡張し、ついには現在のインドネシアの領域全部を植民地としました。<sup>1)</sup> (図 1, 2, 3)

## 2.2. オランダ商事会社 De Nederlandsche Handel-Maatschappij の設立と貿易独占体制

第二が、倒産したオランダ東インド会社に代る、巨大な民間株式会社ながら国策会社であるオランダ商事会社 De Nederlandsche Handel-Maatschappij（この映画の副題にあります）を 1824 年に設立したことで、出資を募るため、国王みずから一割強の最大株主となり、またその内帑金から最低 4.5% の配当を保証しました。

新生オランダが植民地でその熱帯特産物を買付けて、ヨーロッパ市場で一定のシェアを取り戻すには、なによりも対貨となる工業製品、なかでも綿布や綿糸がますます不可欠となってきましたが、この当時、イギリスは、すでに産業革命の終盤を迎えて世界商業を支配しつつあり、アジア貿易の拠点として自由港シンガポールを築き、またインドやオーストラリアを含めた海運のネットワークを築き、イギリスや英領インドの商人は、そのジャワ占領期からすでにオランダ植民地市場に大きく食い込んでおり、オランダの一般の民間の商社では到底太刀打ちできませんでした（オランダ商人さえ、ロンドンに寄港して綿布を仕入れることを余儀なくされておりました）。そしてイギリスは、事実上東インド植民地返還の条件としてその市場の相互開放を要求しており、もはやオランダも植民地貿易を東インド会社時代のように本国の独占のもとにおくことは国際的にも不可能でしたが——イギリスに対抗しながら——オランダ領東インドへ自国の綿製品など工業製品を輸出し現地物産を買占めるために、形式的には民間の一企業ですが、この巨大商社を創立します。ちなみに、この会社が、幕末の開国までしばらくは長崎のオランダ商館貿易も統括していました。(図 4)

オランダは 1824 年に東インド植民地で外国産綿 = 亜麻製品に、ヨーロッパからの直接

図1. オランダ領インド統治機構

加納 (1996), 宮本 (2000), Encyclopaedie (1917-40)などを参考に筆者作成

オランダ領インド統治機構



図2. オランダ領東インドとその行政区画

Cribb (2000) .124.

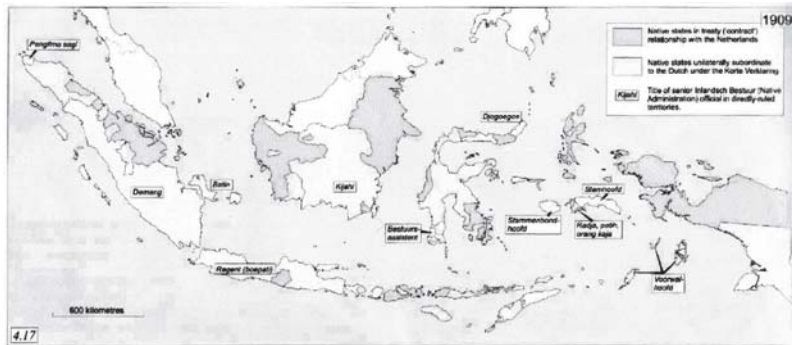
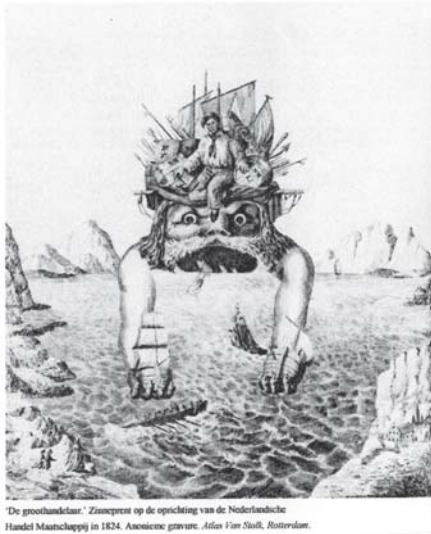


図3. ジャワ＝マドゥラ島の理事州

Cribb (2000), 125.



図4 オランダ商社会社の特権や商業独占に対する風刺画 (1824年)  
Romein/Romein-Verschoor (2006), 639



製品を供給する工業地帯を失い、再びイギリス製品が席卷します。この危機に直面したオランダは、新たにオランダ国内の綿工業基地の育成を計り、これまで細々と生き永らえてきたドイツとの国境に近いトゥウエンテ地方の綿工業の——大量の発注だけでなく資金の供与なども含めて——育成に精力的に取り組みます。しかし、この度は、アジアのイギリス商人たちがオランダ商社会社や植民地当局の排他的オランダ製品優遇政策に反発し本国政府を突き上げ、パーマーストン外相が1824年のオランダ＝イギリス通商条約、すなわち外国商品や外国船は本国製品や自国船の2倍以上は課税されないという規定に反していることを難じます。オランダもこれを認めて、表向きはイギリス製品への25%関税に対し、オランダ製品にも12.5%の関税を課さざるをえなかったのですが、じつは植民地政庁はこれをこっそり《オランダ商社会社》に払戻し、本国の綿業企業への低利融資や綿製品買い付けによる損失補填として活用されました。このお陰で、オランダもヨーロッパの綿業国のひとつとなり、東インド市場では再びその6割強を占めたのですが、これも現地の人々にイギリス製品に比して少なくとも25%、実際にはそれ以上も割高なオランダ産綿製品の押し付け、また輸入関税を払い戻すなど、隠された本国への送金を意味していました。<sup>2)</sup> (表2, 3)

輸入には25%、インドなど喜望峰以東からの輸入には35%という高率の保護関税を設け、他方でこの会社が国産綿製品を大量に買付けて、1828年にはネーデルランド王国（オランダとベルギー）製品輸出はイギリス製品を抜きます。これを支えたのがベルギー（ヘント）の綿工業で、ウィーン会議以降ナポレオン帝国から切り離され苦境にあったこの地の綿工業の苦境を救うとともに、イギリスに対抗する重要な消費財を獲得する、一石二鳥の効果がありました。（表1）しかし、1830年のベルギー独立革命が勃発すると、オランダは、ベルギーの綿製品を植民地市場から締め出し、オランダは東インド植民地市場に供給する綿

表1. ジャワの輸出入 1825-30年

(政府による物資の移動を除く)

年次	総輸出入額	種 目						
		ネーデルラント向け輸出額		ネーデルラント製		英国より		
		ネーデルラント向け輸出額	ネーデルラント製	ネーデルラント製	英国より	ネーデルラント向け輸出額	ネーデルラント製	
1825	16,026	8,494	(千) 277	8,605	(千) 16	237	5	39
1826	12,791	6,506	340	6,791	19	317	9	44
1827	14,868	8,362	399	7,321	32	503	8	36
1828	16,299	9,118	416	8,024	25	456	23	94
1829	13,818	6,843	281	4,935	73	1,231	46	150
1830	12,753	6,586	288	4,577	108	1,558	?	48

\* 1,000 グルデン

(単位: 1,000 グルデン)

年 度	総輸入額	ネーデルラント製	ネーデルラント製	英国より	総 製 品			
					ネーデルラント製	ネーデルラント製	英国より	英国より
1825	12,433	2,478	634	1,930	1,696	257	213	1,384
1826	10,250	3,873	2,045	1,078	2,211	1,343	1,256	738
1827	13,143	3,263	1,372	2,094	2,827	883	857	1,698
1828	15,359	6,457	3,698	2,166	4,890	2,965	2,951	1,860
1829	14,567	6,708	4,358	1,899	5,118	3,507	3,446	1,541
1830	15,038	6,305	3,628	1,724	3,884	2,530	2,373	1,217

Statistiek van den handel en de scheepvaart op Java en Madura sedert 1825 en van 1855-1865, uitgegeven door G. F. Bruyn-Kops, I.

表2. ジャワの輸出入 1835-65年

(単位 100万グルデン)

		1835	1845	1855	1865
輸 出	総 輸 出 額	32.2	64.5	78.3	101.4
	オランダ向け	22.3	48.0	60.2	80.9
	砂 糖	5.8	20.3	20.5	32.4
	コ ー ヒ ー	14.0	20.1	32.4	83.7
輸 入	総 輸 入 額	17.8	27.1	33.0	48.6
	オランダより	4.3	9.6	11.7	31.8
	麻・綿製品	4.1	10.9	14.4	14.2
	オランダより	1.7	6.6	7.7	7.2
	オランダ製品	1.5	5.3	6.6	4.7
	イギリスより	2.2	4.1	6.3	6.0

(注) 1 グルデン=1/12 ポンド  
 (資料) G. F. De Bruijn Kops (ed.), *Statistiek van den handel en de scheepvaart op Java en Madura, 1825-1865* (Batavia, 1857-60).

表3. ジャワへの綿製品輸出 (グルデン)

	イギリス	オランダ <sup>1)</sup>	フランス	アメリカ 合衆国	ハンブル ク	総 額
1829	1,562,760	3,485,079		400	43,113	5,091,352
1830	1,395,030	2,373,309	2,271	9,377	57,495	3,837,482
1831	1,473,372	1,389,905	475	34,508	11,838	2,910,098
1832	1,798,880	67,240	21,880	11,378	8,904	1,908,282
1833	3,813,063	90,172	6,989	8,849		3,919,073
1834	3,978,103	330,489	24,880	40,859	7,336	4,381,667
1835	2,435,369	1,549,744	107,378		11,644	4,104,135
1836	2,838,012	3,280,655	17,211		1,055	6,136,933
1837	3,303,279	3,678,740	29,923	23,760	14,375	7,050,077
1838	3,783,014	5,775,321	24,442	75,007	4,355	9,662,139
1839	2,984,314	7,304,258	57,503	90,250	22,667	10,458,992
1840	3,975,599	8,895,117	41,217	20,709	60,399	12,993,041

1) 1829-31は、ベルギーを含む

Muller (1857), 84-91; Van der Kraan (1998), 22, 25, 53



### 2.3. 強制裁培制度

そして、三番目が、オランダ植民地搾取の悪名をとどろかせることとなる《強制裁培制度》Het Cultuurstelselで、イギリスでさえインドでこれほどの収奪はやりませんでした。ジャワでは、1810年のイギリスの占領下で、総督ラッフルズ J.S.Raffles 主導のもとで、農民に土地所有権を認めて地税を負担させる自由主義的改革が緒につき、ここを返還されたオランダもこの路線を踏襲するかにみえました。しかしオランダは、1830年から、なりふり構わずこれに逆行する政策に転じます。すなわちジャワの一定地域の農村で、租税に代わり農民の耕地または労働時間の2割に、政府が指定するコーヒー、砂糖、藍、タバコ、キニーネなどヨーロッパ市場向けの植民地産物を強制的に作付けさせ、対価は市場価格から見るとほんの取るに足りないものですが、植民地政府が買い上げ、それをオランダ商事会社に委託してアムステルダムで競売にかけるもので、ここを拠点とする仲買人たちの手を経てさらにハンブルクをはじめヨーロッパ各地に再輸出されていました。そして、この制度を確実に運用するため、オランダ人や現地人の官僚にも収益の一部を配分しました。そのなかでとりわけ大きな利益、つねに70%前後を生み出したのがコーヒー、残りが砂糖や藍などそれぞれ10%台で占めていました。(表4)これには若干の注釈が必要で、砂糖や藍は、水田を潰して植えつけられたことで、農民を最も苦しめたものであり、他方でジャワからの輸出の金額では、砂糖はコーヒーに匹敵していましたが、ヨーロッパ市場では甜菜糖や他の植民地の競争が激しく利益はさほど大きくありませんでした。これは文字通り、植民地の農民の血と汗の結晶で、《オランダ商事会社》への手数料(これは国王を筆頭とする株主への9%台の高配当を保証します)や運賃を差し引いた売り上げが本国政府の国庫に納められました。こうした植民地から納入金は純益 *batig slot* を呼んでおりますが、その90%がこうした植民地農産物の売り上げで、残りが錫からの利益です。最盛期にはこの純益は本国の税収などの経常国庫収入全体の3割以上、1856～65年ころには7会計年度にわたり5割を超え、利払いだけでも歳出の47%を占めた膨大な国債の元利を返済し(表5、表6、表7)またこの資金の信用に支えられてこれまでの4.5～5%の古い高金利の公債を4%公債に借り替えることにも成功します。さらに1860年代には、アムステルダムと北海を最短距離で直接結ぶ北海運河 *Noordzee-Kanaal* やライン河口の《新水路》*De Nieuwe Waterweg* などの巨大公共工事、あるいは内陸部やドイツ、ベルギーを結ぶ、国有民営鉄道網建設などのインフラ整備の直接投資あるいは公社や国の建設公債もこれで賄われました。(図5の諷刺画参照)またオランダは、1830年以降も相変わらず残されていた一般大衆への重い消費税(穀物製粉税や豚・羊肉税)、さらには繊維工業に

表4. 強制栽培 作物別純益 (グルデン)

年	コーヒー	砂糖	藍	コチニール	
1840-44	40,277,637	-8,217,907	7,835,772	-20,421	
1845-49	24,549,042	4,136,060	7,726,362	519,661	
1850-54	77,539,790	3,384,980	6,785,999	444,626	
1855-59	105,599,071	33,704,786	5,854,527	-43,695	
<b>1840-59</b>	<b>247,965,540</b>	<b>33,007,919</b>	<b>28,202,660</b>	<b>900,171</b>	
	シナモン	胡椒	茶	タバコ	純益合計
1840-44	-151,310	132,744	-514,394		39,341,651
1845-49	-171,798	58,548	-1,666,495	-94,560	35,056,820
1850-54	46,509	205,138	-1,840,758	-4,461	86,534,823
1855-59	206,006	203,398	-2,448,870	-60,518	142,602,693
<b>1840-59</b>	<b>-70,593</b>	<b>599,828</b>	<b>-6,470,517</b>	<b>-159,539</b>	<b>303,535,987</b>

Fasseur (1975), 20,119-120.

表5 年代別強制栽培純益

年	金額
1831-1840	93
1841-1850	141
1851-1860	267
1861-1870	224
1871-1877	98(119)
<b>1831-1877</b>	<b>725</b>

単位100万グルデン

De Jong (1982), 32, n. 4.

1871-77年については、( )は

De Waalの数字

表6. 植民地からの財政支払いの本国経常収入に対する比率

1850年以前平均	19%
1851-1860	31.5%
1861-1870	24%
1871-1877	13%

De Jong (1989), 40; Fasseur (1975), 118.

表7. オランダ国家財政とインド植民地上納金 (グルデン)

	本国経常収入	東インド植民地拠出	一般支出	国債利子	国債償還
1851	59,013,063	16,382,698	31,940,356	35,838,874	7,667,385
1855	63,319,285	24,347,850	38,809,399	33,696,250	12,391,522
1860	62,402,493	32,359,171	41,278,746	29,644,581	13,205,896
1861	63,260,715	32,994,720	43,026,242	29,381,586	14,305,852

Fasseur (1975), 236, n. 30.

表8. オランダ領インド植民地財政と本国への上納金  
年平均 単位 100万グルデン

	総収入	本国への拠出総額	同 純額
1817-1826	(20.9)	0.7	
1831-1840	45.1	9.3	5.4
1841-1850	70.5	14.1	10.7
1851-1860	97.3	24.4	29.5
1861-1866	118.6	32.4	30.9
1867-1877	146.7	13.9	16

Creutzberg (1976), 18.

図6 オランダ本国財政における公債費比率

—— オランダ本国 + 植民地拠出  
—— オランダ + ベルギー + 植民地  
----- オランダ本国経常収入

Horlings (2003), 154, Fig8・2

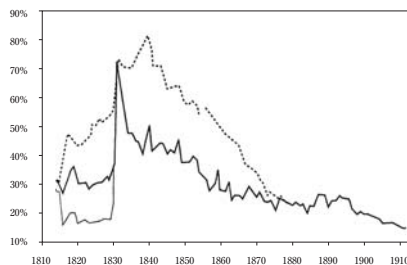




図5. オランダ政府の『純益』による鉄道網建設計画にたいする風刺画



オランダよ見よ！[東]インドの純益の黄金で鉄道網を編むという、汝の夢を。だが、かなたのソロ[ジャワ]の地から、山から大浪が逆巻きながら降って汝の理想を嘲笑っている。汝もせいぜいこれに威張りかえすがよい。

De Jong (1982), 28.

ちの貪欲も手伝って絶えず過大な割り当てが課せられ、これを達成できないと厳しい処罰が待っていました。その結果、稔り豊かな筈のジャワで農民はその分自分の食料生産への田畑の面倒を見る暇がなくなりました。そのため、1843年、48 - 50年と中部ジャワで大飢饉が起こります。<sup>3)</sup>

### 3. 小説『マックス・ハーフェラール』の誕生

こうしたオランダの植民地政策を実地に体験し、それを内部告発とも言うべきこの文学作品の形で、1860年に出版しましたが、長年東インドの地方行政官として勤務してきたエドゥワルト・ダウエス・デッケル Eduard Douwes Dekker (1820-1887) ダウエス・デッケルで苗字 肖像写真は図7)で、この作品(ペンネーム、ムルタトゥーリ『マックス・ハーフェラール、もしくはオランダ商社会のコーヒー競売』 *Multatuli, Max Havelaar, of de koffij-veilingen der Nederlandsche handel-Maatschappij*)はやがては、オランダや欧米で大きな反響を巻き起こすことになります。舞台は、1855年、ペリーの黒船の艦隊が日本開国を果たしてやっと本国に戻ったころの、ジャワ島西端のバンテン理事州(図8、表

重い負担となった糊、泥炭、石炭への消費税や営業税を逐次撤廃し、しかもそれは有産者の反対の強かった所得税導入を先送りしながら進められました。他方、逆に植民地の側からすれば、歳入の約1/3が、本国への上納金として持ち去られることを意味したのです。(表8)

そしてこうした植民地の物産の販売や植民地との貿易や海運、造船や機械工業、金融など通じて、オランダ経済も立ち直り、資本も蓄積され、経済成長のおかげで輸入関税など税収も伸び、国家財政も無事立て直され、歳出に占める国債費の比重も、他のヨーロッパ諸国なみに軽減されました。(図6)しかし、植民地の農民は、この間塗炭の苦しみを味わってきたわけですし、法律で定められた耕地2割という上限など有名無実で、植民地当局も、また報奨金のおこぼれに与る現地のジャワ人首長やオランダ人官僚た

図7 エドゥアルト・ダウエス・デッケル (1820-1887) の写真



Tropenmuseum, Amstrdam, Foto-Collectie 撮影年代は不詳

9)で、ここはかつてアジア貿易の中心の港市バンテンを中心にバンテン王国が栄えていましたが、1808年についてオランダに征服されたとはいえ、旧貴族がなお大きな勢力を失っておりませんでした。ここは理事州が宮城県位の広さですが、その4県のひとつが、ルバック県で、面積はほぼ鳥取県くらい、人口は理事州全体で76万、ルバック県は13万程度です。衛星写真をご覧になればすぐお分かりのようにここは森林で覆われた山岳地帯が大半で、水田や畑の乏しい貧しい農業地帯で、強制裁培の対象にさえなっていないところですが、かわりに、金納の税金を納めなければなりません。理想に燃える若いオランダ人官僚のマックス・ハーフェラルが、前任者の急死のあと、

ここ県都ランカスピトゥン郊外の公邸に赴任してきますが、そこでぶつかったのは、現地人貴族の県長がその娘婿のパン・クジャン郡長と手を携えて、農民に自分の農場のため不当な賦役を課しその収入を増やしており、また農民の財産、特に水牛などを不当に取り上げている現実で、こうした旧支配階級の地方官は、相変わらず100人もの召使いを抱え昔の豪華な生活を改めていませんが、政府から支給される俸給では到底これを維持できず、また同じ貴族や親戚の派手な付き合いもあるなか強制裁培の報奨金も手に入りませんから、勢い農民へ苛斂誅求に走っていました。これに気が付いて上役の理事官に私信で相談していた前任者スローテリングが実は一服盛られて死んだらしいという驚愕すべき疑いを未亡人（ヨーロッパ人と現地人の混血でオランダ語は解せず、オランダ人社会にも入れ

図8 バンテン理事州

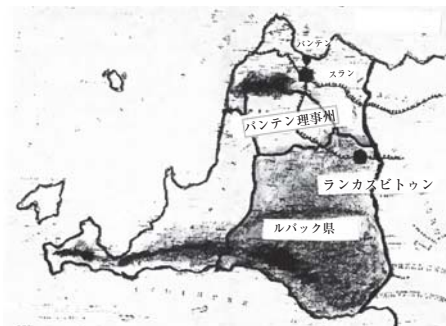


表9. バンテン理事州の各県の構成 (1878年)

	首都	郡数	面積km	人口
<b>理事州全体</b>	<b>スラン</b>	<b>21</b>	<b>8,662</b>	<b>755,598</b>
スラン(北)県	スラン	8	1,734	292,715
パンデグラ ン県	パンデグラ ン	5	2,747	214,411
ルバック(南) 県	ランカスピウ ン	5	2,860	129,388
チャリンギ ン(西)県	チャリンギ ン	3	1,281	114,358

Nederburgh (1888) ,49.

Melvill van Carnbee, P., *Algemeene Atlas van Nederlandsch-Indië*, 1853-1862. kaart Ra310 deel 4 (<http://nla.gov.au/nla.map-ra310-s4>) を基に筆者作成

ない)から聞かされた彼は、ついに決心して県長と女婿の郡長を正式に理事官に訴えます。しかしこうした現地貴族たちは、互いに幾重にも姻戚関係で結ばれ全島に深く広く根を張っており、彼らこそ、強制栽培制度を支える貴重な担い手であることを知っている理事官ら植民地の上層部は、これを握りつぶし、かえって不確かな証拠で協力しあうべき現地の支配者と軋轢を起こした廉でハーフェラールを叱責し、かれは中部ジャワ、マデウン理事州のガウイー Ngawi 県の副理事官に配置換えになります。ここは、旧バンテン理事州理事官の義弟が、理事官をしており、ハーフェラールはそこでは手も足も出ないことになります。これを受け容れないハーフェラールはみずから辞表を書くことになります。そして、最後まで総督の善処を期待して手紙を出し、返事を待ち続けますが、それも空しく落魄してアムステルダムに戻り、かつてのラテン語学校時代の同級生で義父とラスト商会 Last & Cie. の共同経営者として、今は羽振りのいいコーヒー仲買人をやっているドゥローフストッペル Droogstoppel (乾いた切り株、つまらない人物の意)にこれまでの体験と真実を綴った膨大な記録を渡します。彼は、これを読んで驚愕し、早く改革する必要があることを痛感して、本の体裁になるよう書き直していきます。<sup>4)</sup>

この本は、ルバック県が舞台ですから直接、強制栽培制度を描写してはいませんが、随所にそれも含めたオランダの現地人の搾取と収奪、その両輪である《オランダ商事会社》のコーヒー競売への批判が述べられ、またオランダ当局と現地首長の二重の搾取の犠牲となった、農民の若者、サイージャとアディンダの悲恋劇で、たまりかねて蜂起した農民への呵責なき鎮圧が描かれております。

作者ダウエス・デッケルは、ヨーロッパに戻ったものの、巨額の負債を抱えて借金取りに追われ、妻子と別居しながら、1859年にブリュッセルのグラン・プラスの安宿、オ・フランス・ベルジュの屋根裏部屋で、9月17日から10月13日までわずか一ヶ月足らずで、自らの体験をもとに、ムルタトゥーリ Multatuli (ラテン語で「われおおいに苦しめり」の意。ローマの詩人ホラチウスの一節に由来)というペンネームでこの小説を書き上げました。当時のオランダは、すでに1848年の二月革命の影響で憲法が改正され、言論=出版の自由は保障されていたとはいえ、自国の植民地政策の根幹を批判する本書の出版は容易ではありませんでした。それでも、ファン・レネップ Jacob van Lennep という当時オランダで著名な作家が出版を引き受けてくれましたが、著者は著作権譲渡を余儀なくされたのみならず、レネップの要求で、政府との軋轢を惹起しそうな、関係者の実名を伏せるなどいろいろの修正を施さざるをえませんでしたし、出版部数も、高価な2冊本版、しかも1300部(それでも当時の無名作家のデビュー出版の相場の3倍だったといわれる)に過ぎませんでした。因みに彼のオリジナル原稿が発見されたのが1910年のことで、ようや

く第二次世界大戦後の1949年にこの「ゼロ版」とでもいふべき本書が世に出ることができました。<sup>5)</sup>

#### 4. 『マックス・ハーフェール』とオランダ内外の反響

ただし、この小説は、直ちにオランダ本国や世界各国でセンセーションを巻き起こしたとは到底言い難く、作者も長年にわたり不遇の状況が続きます。当時、オランダでも、先に触れたように、漸く1848年の二月革命の余波で議会制民主主義の憲法が実現し、植民地も国王の専管事項から本国の内閣と議会の管轄に移っており、議会でも、行き詰まりを見せてきた植民地問題の解決が緊急の課題としてとりわけ自由主義者から多くの改革の議論が叫ばれており、ちょうどその折に一石を投じたといふべきで、高名な民族学者のフェート Veth が出版後すかさず、その編集委員を務める高級文芸評論雑誌『道案内』De Gids に長文の書評を寄せ、これを、「アンクル・トムの小屋」のオランダ版と讃え、またのちの植民地大臣のロフセン Rochussen も著者をストー夫人に比していました。<sup>6)</sup>しかし、オランダでの反響も当面はこの程度にとどまり、内外ともオランダの植民地体制——とりわけ財政難のなかでは——にたいする支持勢力はなお根強いものがありました。ちょうど同じ年にイギリスで出版されたのが、カルカッタの弁護士マニー J.B.W. Money による、『ジャワ。その植民地統治法』です。これは、インド独立戦争と東インド会社廃止後のイギリス領インドとオランダ領東インドを比較して、オランダの間接地方行政と強制栽培制度が勝っていることを説いたもので、イギリスでも大きな反響を呼び、オランダの保守派は、現体制維持の論拠としてこれを引用し、はやくも翌年そのオランダ語訳が出ます。そして、こうしたオランダ植民地支配体制のなによりの信奉者だったのが、当時はまだ皇太子であった後のベルギー国王、レオポルド二世であり、彼はやがて後に、1885年から1908年まで国王個人の資格でコンゴ自由国の君主となり、ゴムなどで残虐な強制栽培制度を再現しますが、彼は、ダウエス・デッケルがブリュッセルでこの本を執筆したにもかかわらず、そして1864年の《社会科学促進国際協会》のアムステルダム大会で登壇して熱弁をふるったことが新聞で報じられても全く関心を示しませんでした。<sup>7)</sup>

こうした流れが変わり、イギリスの論壇でも強制栽培制度を糾弾する論調が現れたのには、なんとといっても1868年に、アルフォンス・ナハイス男爵 Alphonse Baron Nahuis の手で初の英語訳（初版が底本、ただし固有名詞は復元）が出版されたことが大きく貢献しましたし、著者が終の棲家としていたドイツでも、やっとこれに遅れること7年で、有名な詩人のテオドール・シュトロマー Theodor Stormer の手で、ドイツ語訳が出版

されます。(ただし、これは枝葉を省いた部分訳で、完全訳は1890年のカール・ミチュケ Karl Mitschke に俟たねばなりませんでした。) また、そしてフランス語でも、1876年、全訳がパリで出版されます。その後、この作品の文学的価値は次第に国際的にも認知されはじめるのですが、植民地支配 = 搾取の批判の書としては、自由主義者からはあまり評価されませんでした。それは両国とも長年アジアの植民地問題に対する関心は決して高かったわけではなく、しかもようやく1870年代から遅れて植民地経営に乗り出そうする動きも始まりましたが、フランスやドイツの植民地拡張論者にとっては逆に、オランダの植民地政策こそ大いに参考にすべきモデルであったのです。むしろ、「書物はそれ自身の運命を持つ」という格言どおり、著者が決して共感をいただいたわけではなかった社会主義者たち、とりわけアナキストが、本書のなかに植民地住民あるいは虐げられた諸国民の解放のメッセージを読み取ったのです。オランダでも高名な社会主義者ドメラ = ニュウエンハイス Domela-Nieuwenhuis がこの本を愛読し、その影響で、アナキストとしてフランスで活躍するコーエン Alexander Cohen が、ムルタトゥーリの短編作品をいくつかフランス語に翻訳して有名な雑誌に連載しました。これが当時ベルリンのフリードリッヒスハーゲン地区に集う自然主義派の詩人や小説家の有名な文学サークル (Friedrichshagener Dichterkreis) の一員でありコーエンの知己でもあったカンフマイヤー Bernhard Kampffmeyer の目にとまって、彼がその一部をドイツ語に訳し、さらに同じサークルの仲間であったシュポール Wilhelm Spohr も1893年に、かのランダウアー Gustav Landauer が主宰する独立社会主義 = アナキスト系の機関誌『社会主義者』Der Sozialist にムルタトゥーリの翻訳を発表します。そして、ついには1900年に、シュポールは、『マックス・ハーフェラール』の全訳をミンデンの Bruns-Verlag から出版しました。この訳によって『マックス・ハーフェラール』が「再発見」され、ドイツ語版を通じて、さらにスカンディナヴィア諸国、あるいはハンガリーやロシア、チェコ、ポーランドなどスラブ圏で広く読まれ、また重訳されました。他方でフランス語の新訳は、ベルギーやラテン系諸国で広く読まれ、翻訳されることになるのです。そして、1907年ウィーンのプロイトも、また1917年の2月革命を目前にして『帝国主義』の執筆に忙しかったチューリヒのレーニンもこれを読んだと言われております。そして革命後ソ連時代にもロシア語訳は植民地解放運動への弾みをつける意味もあってか、何度か再版されました。<sup>8)</sup>

本書は現在ではオランダ文学では世界的に最も名の通っている作品として、2002年にオランダ文学協会から最優秀オランダ文学作品に選ばれ、英訳は《ペンギン古典文庫》に入って版を重ねておりますし、ドイツ訳もその後、第二次世界大戦後にいたるまで、3回も改訳され、第二次大戦後も、シュトロー訳の再版も含めて、東西ドイツ双方やスイスで



出版され続け、現在では新訳が《ウルシュタイン文庫》にも収録されています。ただし、インドネシア語への翻訳は植民地時代には絶対に許されませんでした。

もちろん、著者はオランダの植民地領有自身は否定したわけではなかったとはいえ、国内での政府や利害関係者からの風当りは並大抵ではありませんでしたが、結果としては、オランダ自体でもそろそろ限界であることが自覚されており、また国際的にも批判の強かった強制栽培制度にかわる民間資本による開発体制への移行、古い現地人貴族層を排除した、現地人で学校を卒業してオランダ語もできる行政官僚と植民地当局による農民の直接支配という統治体制への移行を促す切掛けになり、強制栽培制度は1865年から、すでに農民に過度の負担を強いる割には利益に乏しい一部の作物、タバコや藍、茶などで廃止され、1870年から砂糖栽培も二つの『農地法』をもって完全に民間資本に開放され、事実上廃止されます。ちょうど1873年から、スマトラ島の最後の抵抗勢力だったアチュー征服のアチュー戦争始まって、植民地側の軍事費負担が急増したこともあって、1877年以降は、植民地からの本国財政への拠出もなくなります。ただし、コーヒーでの政府の関与は1917年まで残りました。

このように、オランダの植民地政策は、強制栽培と《オランダ商事会社》の独占体制からは、外国資本も含めた民間資本による資本主義的第一次産品生産と貿易への移行し、現地有力者を排除した、植民地行政組織の整備を促すことになったのですが、もちろん、統治体制が改革されたとはいっても、それはオランダ本国や欧米の資本の支配に代わっただけであり、1942年の日本軍の侵攻までこのような植民地支配体制が続くことになります。

しかしそれでも、自国の植民地統治を自ら批判するこの著者のような自由主義者が出て、その批判文学が出版されたことは、わが国の歴史を顧みてこれに匹敵する作品がでなかったことを考えても、大変勇気があることであり、オランダの良心と自由がまだ全く失われたわけではなかったことがひとつの救いともいえます。

ただし、本書のインドネシア語訳は、1950年に末尾3章の『サイジャとアディンダ』の部分が翻訳出版されたあと、全訳はやっと1972年に世に出ましたが、著者をヒューマニストとして高く評価する声とならんで、現地人の地方行政官のみを悪玉に仕立てて、植民地支配そのものは肯定しているという批判、あるいは現地の慣習などへの理解が足りないという声もいまなお強いのは事実です。



## 5. わが国での『マックス・ハーフェラール』

さて、わが国でいえば幕末＝開港の騒然とした時代に出版された本書は、——幕末や明治初期ならば、本書を翻訳できるオランダ語に熟達した人にはこと欠かなかったでしょうが、皆、軍事や医術など科学技術の導入・吸収に追われて、まったく顧みられず——明治に入ってオランダ語やオランダ文化への関心が急速に薄れるなか、翻訳者が得られないという語学上のハンディーもありましたが、植民地の被支配者への共感に極めて乏しくなり、また明治、大正、昭和を通じて、朝鮮や台湾、満州などのわが国の植民地支配への痛烈な批判として跳ね返ってきかねない懸念もあったのでしょう、これだけヨーロッパで注目を集めても、いろいろの世界文学全集や文庫が企画されるなかで重訳ですら全く翻訳が収録されませんでした。

ところが1942年2月と、なんと太平洋戦争が勃発し、日本のオランダ領植民地侵攻が始まった絶妙のタイミングで、ときの東京外国語学校教授の朝倉純孝氏の手で『蘭印に正義を叫ぶマックス・ハーフェラール』と題して、本書の全訳がジャパン・タイムズ新聞社の出版部門であるタイムズ出版社から出版されます。ちょうど、1930年代からわが国のオランダ植民地市場への経済進出は目覚しく、また経済摩擦も生じるなか、オランダ領東インドへの関心も高まってきたのですが、その後急速に太平洋戦争に突き進むわが国では、『南進』の重要な標的としてオランダ領東インドにも目が向けられ、この前後、国策の研究機関である東亜研究所が設立され、様々のオランダ領東インド関係の文献も多く、研究者を動員して翻訳されており、本書はこうした国策の流れに副ったものと思われたのでしょうか、なんと、文部大臣推薦図書、そして日本出版文化協会推薦というお墨付きをえます。ただし、訳者の名誉のために一言しておけば、この翻訳の解題には、当時決して珍しくなかった時局便乗や「聖戦」賛美、あるいは無用の弁解などはまったくなく、淡々と客観的にこの作品を解説したもので、朝倉教授の見識を窺わせますし、この翻訳も開戦の何年も前から心血を注いできた作品で急場に間に合わせた物ではないと思います。しかしこれはまさしく、日本人に日本の東南アジアにおける占領政策に疑問を抱かせるだけでなく、なによりもこの日本語訳が植民地の朝鮮や台湾、「満州」で読まれれば、日本の植民地支配への痛烈な批判になりかねない諸刃の剣で、果たせるかな、たぶん陸軍あたりの横槍だと思われそうですが、事実上の発禁処分（おそらく文部大臣推薦の建前もあって公式発禁とするのは具合が悪かったのでしょうか）となってすぐ市場から姿を消し、極めて限られた図書館で厳しい閲覧制限の下に置かれたようで、戦後も長らく、主要大学図書館には所蔵されておらず、古本市場でも手に入りませんでした。こうしたことは、戦時下の言論統

制や検閲の中でのできごとで真相はいまなお不明です。<sup>9)</sup>

そして戦後はオランダ語の教材としてごく一部が対訳で利用されたにとどまりましたが、やっと2003年、わが国でも、東京外国語大学のインドネシア学科の最後のオランダ語講座担当者で私の研究仲間のオランダ経済史家の佐藤弘幸名誉教授の手で、長年のご苦心の成果がやっと実って戦後本国でようやく刊行された無削除の完全版の翻訳がトヨタ財団の助成で、スダ文学の専門家である南山大学の森山幹弘教授の協力により、やっと全訳の形で出版されまして、私たちも全部を読み通すことができるようになりました。これで、わが国もオランダへのひとつの恩義を返せたことになります。

## 6. おわりに——本作品の現在と映画化

その後、両大戦期には、本書は国際的にもさらにその評価を高め、ヘルマン・ヘッセやD.H. ローレンス（1927）など第一級の文学者が本書の翻訳新版に序文書いております。そして、この著者のアムステルダム旧市街の生家（Korsjespoortweg 20）は、1910年に《ムルタトゥーリ博物館》となり、彼の遺品を取蔵展示し、そこには、わが国や韓国語も含め世界24の言語の翻訳が展示されており、1946年から『ムルタトゥーリ協会』がここを研究拠点としさまざまな啓蒙活動を行い、1978年から『ムルタトゥーリについて』Over *Multatuli* という専門雑誌を年2回発行しております。そしてその近くの *Toorenluis* とシングル堀 *Singel* の交差点の広場には、その没後100年を記念して彼の銅像（*Hans Bayens*）が建てられ、『人間の使命は、人間たること』という彼の言葉が刻まれています。こうして不遇と貧困のなか異国で客死した著者もようやく故国で復権を果たしました。そして、2010年には、本書の刊行150周年を記念した国際シンポジウムがドイツのベルリン自由大学で開かれ、2012年に出版されたその報告集には、多くのドイツ語と英語の論文が寄せられております。第二次世界大戦後も、本書は、南アフリカのアパルトヘイトとの戦いなどで、引き続き多くの人々を励まし続けました。<sup>10)</sup> また、今日では、オランダ、ベルギー、スイス、フランスをはじめ多くの国々のフェア・トレードのNPOが、マックス・ハーフェラーの名を冠しております。

ところで、これだけ有名となったこの小説ですが、オランダ本国はもちろん、英語など外国語でも映画化されませんでした。この作品の映画化は、インドネシアとの独立戦争のしこりも和らいだ1976年のことで、インドネシア側の全面的支援のもと、巨額の資金を投じてインドネシアの俳優も共演しまして殆ど現地ロケで完成しました。ところが、この作品は、映画として筋を一貫させるため、どうしても強制裁培そのものの直接描写や批判

が削られてしまい、サイージャとアディンダの悲恋も大分簡略化されていますが、他方で現地人の地方官僚の腐敗と農民搾取が全面に押し出されていて、スハルト体制の地方官僚への皮肉と受け取られたのか、インドネシア 1987 年まで公開されませんでした。補遺に書いておきましたように、この映画はいくつかの国際映画祭で非英語作品の最優秀賞を獲得しておりますが、時代状況もあって、概して旧植民地宗主国のイギリスやフランスではあまり好評を博さず、かえってアメリカ合衆国の方やノルウェーのような無関係の国ではロングランになりました。

なお映画の方には、いくつか原作にない部分もありまして、たとえば冒頭の国王の国会開院式演説がそうですし、最後の、国王への呼びかけにたいして、国王が賛美歌を歌い始め、それがアムステルダム中心部の教会での紳士や淑女の賛美歌斉唱に移っていく場面がそうです。これは、補遺にありますように、これは詩篇 67 番で、1544 年、宗教改革のさなかにオランダやベルギーの宗教改革の指導者が翻訳に参画しジュネーヴでブルボンによって作曲された曲を付した、由緒をほこる賛美歌ですが、これは植民地支配を神から授かった使命と説く、オランダの精神的バックボーンで支配的宗派のカルヴァン派教会（教会内部は聖画像をすべて取り払っています）への痛烈な批判を意図しておりますし、また反乱農民にたいする容赦ない殺戮の場面は、おそらくはこの映画が計画された時代の、ベトナム戦争を彷彿させるものだったと思われまます。

それでは、非常に長編で、英語の字幕で申し訳ありませんが、この時代のインドネシアもアムステルダムも私が見た限りほぼ正確に再現されております。最後までご鑑賞いただきたいと思います。この映画の関係資料は末尾の補遺に資料として掲載いたしましたのでご参照いただきたく存じます。

私がこの作品の映画化をはじめて知ったのは、1986 年の在外研究のなか、滞在先のブリュッセル自由大学の大学祭でのフランス語字幕によるビデオ上映でしたが、すでにビデオは販売されておらず当時は入手できませんでした。その後、原作の訳者の佐藤弘幸氏が、翻訳完成のおりオランダのムルタトゥーリ博物館を訪問されてこの各国語字幕つき DVD を買い求めて筆者に贈ってくださいました。それがこの DVD で、私のもともとの計画では、映画のシナリオを入手して日本語訳を添える積もりでしたが、到底私一人の力では手にあまり、また技術的には字幕は版權との兼ね合いで難しいので諦めざるをえませんでした。この映画は、一昨年東京外国語大学のインドネシア語学科で授業の一環として 3 回に分けて英語版で上映されましたが、このような形で広く市民の皆さんに公開されるのはおそらく今回がはじめてかと思ひます。またいつか日本語字幕でこのすぐれた文学作品の映画が映画館やテレビに登場することを願っております。

**あとがき** 本稿は、2013年3月25日、札幌大学インターコミュニケーション・センター SUICC の開所にあたっての、同センター主催 / 札幌大学総合研究所共催の《ムルタトゥーリ原作『マックス・ハーフェラール もしくはオランダ商事会社のコーヒー競売』、オランダ=インドネシア合作DVD上映会》に際して、本作品の歴史的背景の紹介を兼ねて筆者が行なった講演に大幅に加筆したものである。

当日までの様々の業務を担当し、また図書館で特別展を準備して下さった、研究支援担当の長原芳男、野中よしの両氏はじめスタッフの皆さん、そしてこの外国製の、日本のビデオデッキの規格に合わないDVDをなんとか無事上映できるよう技術的な面ですっかりお世話になった、札幌管財センター、本木孝一氏、また、本稿作成にあたって、種々ご教示をうけ、文献や資料をお借りした、日本語訳の訳者、佐藤弘幸東京外国語大学名誉教授、インドネシア経済史の専門家である北海道大学大学院経済学研究科教授・宮本謙介氏、同文学研究科準教授・長谷川貴彦氏、本学非常勤講師〔現在ハンプルク大学アジア研究所に留学中〕横本真千子氏に、この場をお借りして御礼申し上げます。

## 注

- 1) 和田／森／鈴木 (1977) ; 加納 (1996) ; 宮本 (2000) ; Colijn, (1913) ; *Encyclopaedie* (1917), art. **bestuur**. このレハント regent とは、本来は、オランダのアムステルダムをはじめとする中世以来の特権都市の、閉鎖的門閥都市貴族層からなる市長や参事会など執行部を指す言葉である。
- 2) オランダによるジャワの綿製品市場独占政策は、石坂 (1976), 365-77., 同 (1997) ; 原島 (1984) ; 小林 (2012) ; Muller (1857) ; Van Kraan (1998) ; do. (2204) ; Van der Kemp (1908) ; Posthumus (1916) ; Griffiths (1979), 138-184 などを参照。
- 3) オランダの公式名称としては、『強制栽培』という呼び方はなく、正式には『政庁栽培』 *De Gouvernemntscultuur*, 『栽培制度』 *Het Cultuursetelsel* であるが、実態をよく表しているのので、ここでもわが国での通称に従った。なお、全体像については、宮本 (1993) ; 同 (2000) ; 和田他 (1977) ; Fasseur (1975) ; do., (1978) ; De Jong (1982) ; De Jong (1989).  
ただし、これまでの内外の研究とも、水田稲作に食い込んだ砂糖栽培に集中している反面、純益では7割を占めたコーヒー栽培については、オランダ商事会社を含めた集荷からアムステルダムでの競売までのメカニズムはまだ詳細が解明されていない。なお、コーヒーは、稲作に適さない高地や丘陵地帯に割り当てられ、各村落は未耕作地を開墾して農家あたり600本のコーヒーの木を割り当てられた。政庁は、バタヴィアでの「市場価格」をピコル (125 ポンド) あたり25 グルデンに固定し、政庁はそのうち10 グルデンを地租 *landrente* として差し引き、さらに港までの運送費3 グルデンを徴収した。しかも、この作付け料も、市況の悪いとき10 グルデンに切り下げられた。Fasseur (1975) ,21.
- 4) ドローフストッペル家の住まいやラスト商会の事務所は、ラウリーア堀37番地 *Lauriergracht No.37* という設定になっている。このあたりは、かつてアムステルダムの最盛期1651年の市域拡張による、城壁に囲まれた旧市街の最西端で、アムステルダムとしては豪商たちの大きな邸宅や商会が軒を連ねる一帯であった。
- 5) 著者ダウエス = デッケルの経歴と活動、オランダ政府の対応などについては、すでに邦訳の佐藤弘幸氏による訳者あとがきに尽くされているので、ここでは繰り返さないが、なお一言付け加えておけば、彼はアムステルダムのメノー派の家系に生まれ、兄は同派の牧師であり、最初、彼もこれに倣ってラテン語学校に進んだ。Grave *et al.* (2012), *Vorwort*,8.彼のその後の行動や作品にこの派の宗教的影響がどの程度認められるかはまだ明らかにされていないが、少なくとも、オランダの正統派教会であるカルヴァン派の植民地体制礼賛、使命論を厳しく批判しているのは事実である。
- 6) Veth (1860) ; フェート Pieter Johannes Veth (1814-1895) は、オランダの高名な民族学者で、当時はアムステルダム高等学院 *Athenaeum* 教授で、東インド協会設立者でもあったが、1864-77年、レイデン大学に併設された東インド研究所教授、1877-85年には、レイデン大学の東インド諸島歴史学・民俗学・文学の員外教授を歴任した。
- 7) De Jong (1989) ,69-75; Wesseling,H. L. (1978), 19-22; Schutte (2006) . 有名な博物学者のウォーレスは、名指しでムルタトゥーリを批判している。Wallace (1869),72-73 [邦訳,91頁]。ムルタトゥーリが評価され、強制栽培制度が批判されたのは、ようやく Wedderburn (1978), 96 に俟たねばならなかった。なお、ベルギーのレオポルド二世のオランダ・モデルの植民地構想は、Stengers (1969) ; do. (1977) , ドイツでは、たとえば Heller von Hellwald (1870). ただし、かのフリードリッヒ・リストだけは、慧眼にもオランダの植民地物産貿易での地位が、この『残虐経営』 *Greuelwirtschaft* のおかげであることを見抜いて、1844年の『関税同盟新聞』第30号で、まだしも温和なブラジルと対比している。この点は、神奈川大学名誉教授、諸田實氏からご教示をいただいた。諸田 (2012), 177, 219-20.
- 8) Fährnders (2012) .
- 9) 本書とこの翻訳出版、そして「発禁」は、大塚久雄教授に、強い印象を残し、同教授は戦後も絶えず、

講義でも、そして最晩年にいたるまで、学生や門下生や訾咳に接した研究者などとの談話でも、絶えずこの、腐敗したオランダ植民地政庁や現地の有力者に刃向かって挫折した孤高の若きオランダ人植民地官僚マックス・ハーフェラル、そして翻訳出版後の運命について語ってきた。たとえば『大塚久雄著作集』第13巻（岩波書店、1986年）、386頁（1982年、内田義彦との対談）

- 10) Grave *et al.* (2012) ; *Over Multatuli*, nr.62 (2011)



## 参考文献 (抄)

### 1. 邦語文献

- 石井米雄 監修 (1991)『インドネシアの事典』, 同朋社出版.
- 石坂昭雄 (1971),『オランダ型貿易国家の経済構造』, 未来社.
- 石坂昭雄 (1997)「オランダ=ドイツ国境地域における綿工業の形成と発展 (1830-1914) —— トウェンテ・アハテルフック=西ミュンスターラント・ベントハイム伯領——」北海道大学『経済学研究』, 第47巻第2号
- 加納啓良 (1996),「インドネシアの官僚制」, 岩崎郁夫/萩原宣之編『ASEAN 諸国の官僚制』, アジア経済研究所, 第1章
- 加納啓良 (1988),『インドネシア農村経済論』, 勁草書房
- 加納啓良 (2004),『現代インドネシア経済史論. 輸出経済と農業問題』, 東京大学出版会,
- 小林篤史 (2012),「19世紀前半における東南アジア域内貿易の成長——シンガポール・仲介商人の役割——」,『社会経済史学』第78巻第3号, 89-111.
- 佐藤弘幸 (2012)『図説 オランダの歴史』河出書房新社.
- 佐藤弘幸 (1998),「オランダ」,『スイス・ベネルクス史』(森田安一編, 山川出版社, 世界各国史14).
- 原島正衛 (1984),「ネーデルラント通商会社の設立と発展——1824-1850の組織・活動とオランダ経済——」,『日蘭学会会誌』, 第9巻第1号, 9-32.
- 宮本謙介 (1993)『インドネシア経済史研究——植民地社会の成立と構造』ミネルヴァ書房.
- 宮本謙介 (2000)『インドネシア経済史』, 有斐閣.
- 諸田 實 (2012)『リストの関税同盟新聞』私家版
- 和田久徳/森弘之/鈴木恒之 (1977)『東南アジア現代史』I, 総説・インドネシア, 山川出版社.

### 2. 外国語文献

- Bruijn Kops,G.F. (1857-58), *Statistiek van den handel en scheepsvaart op Java en Madura sedert 1825*, 2 dln.,Batavia.
- Colijn,H.(1913), *Nederlands Indië. Land,Volk,Geschiedenis,Bestuur,Bedrijf en Samenleving*, deel 2, Amsterdam.
- Creutzberg,J./W.M.F. Mansvelt(1976), *Public Finance 1816-1939*(Changing Economy in Indonesia.,Vol.2),The Hague.
- Cribb,R.(2000),*Historical Atlas of Indonesia*, Richmond.
- De Jong,J.(1982),“Nederland en Batig Slot 1831-1875” ,*Groniek*, XVII,27-33.
- De Jong,J.(1989),*Van Batig Slot naar Ereschuld. De discussie over de financiële verhouding tussen Nederland en Indië in de hervorming van de Nederlandse koloniale politiek 1860-1900* ,SDU Uitgeverij.
- Duigan,P./Gann,L.H.,eds.(1969),*Colonialism in Africa 1870—1960*, Vol.I,*The History and Politics of Colonialism,1870-1914*,Cambridge U.P., 2<sup>nd</sup> ed., 1981.
- Encyclopaedie van Nederlandsch-Indië*,8dln.2de druk, samengesteld door J.Paulus et al., Brill, 's-Gravenhage-Leiden, 1917-1940.
- Fähnders,W.(2012),“Der Multatuli-Übersetzer Wilhem Spohr und Friederichshagen”,*Grave et al.*eds. (2012),161-174.
- Farnie,D.A./Jeremy,D.J.,eds.(2004),*The Fibre that changesd the World: The Cotton Industry in International Perspective 1600-1990s*(Oxford UP,2004).
- Fasseur,C.(1975),*Kultuurstelsel en koloniale Baten. De Nederlandse Exploitatie van Java*

1840-1860, Universitaire Pers Leiden.

- Fasseur, C. (1979), "Het 'Indië' van Multatuli" . *Over Multatuli*, nr.3, 4-17
- Grave, J. (2007), "Multatuli in het licht van cultural transfer", *Over Multatuli*, XXIX, nr.59, 4-7.
- Grave, J./, Paamstra O./, Vandevoorde, H., Hg./eds. (2012), *150 Jahre Max Havelaar. Multatuli' s Roman in neuer Perspektive/150 Years Max Havelaar. Multatuli' s Novel in New Perspective*, Frankfurt a.M.
- Griffiths, R.T. (1979), *Industrial Retardation in the Netherlands 1830-1850*, Martinus Nijhoff, 's-Gragavenhage.
- Heller von Hellwald, F. [O.J., 1870?] , *Ueber Colonien und über den holländischen Niederlassungen in Ostindien. Ein Beitrag zur niederländischen Colonialfrage*, Wien -Amsterdam.
- Horlings, E./Smits, J.P./Van Zanden J.L. (2000), *Dutch GNP and Its Component, 1800-1913*. Gronigen Growth and Development Centre Monograph Series 5.
- Horlings, E. (2003), "Miracle Cure for an Economy in Crisis? Colonial Exploitation as a Source of Growth in the Netherlands, 1815-1870" , in: Moore/Van Nierop, eds. (2003), 145-184.
- Money, J.W.B. (1861), *Java or How to manage a Colony. A practical Solution of the Questions now affecting British India*, 2 vols. London, 1861, repr. With an Introduction by Ian Brown, Oxford U.P., 1985. Dutch translation: D.C. Steyn-Parvé, *Java, of hoe eene kolonie moet bestuurd worden*, Zutpehn 1861.
- Moore, B./Van Nierop, H., eds. (2003), *Colonial Empires Compared: Britain and the Netherlands, 1750-1850*. Papers delivered to the Fourteenth Anglo-Dutch Historical Conference, 2000 (Ashgate: Aldershot).
- Muller, Szn., H. (1857), *De Nederlandsche Katoen-Nijverheid en het stelsel van Bescherming in Nederlandsch-Indië*, Rotterdam.
- Nederburgh, S.C.H. (1888), *Tjilegon.- Bantam.-Java. Iets over des Javaans Lasten en over zijne Draagkracht*, 's - Gravenhage, Martinus-Nijhoff.
- Posthumus, N.W. (1916). "De geheime Lijnwaadcontract der Nederlandsche Handel- Maatschappij 1833- 1854" , *Economisch-Historisch Jaarboek*, II, 3-207.
- Romein, J./Romein-Verschoor, A. (2006), *Erflaters van onze beschaving* , Amsterdam 1977, BDNL
- Schutte, G.J. (2006), "De exemplarische Droogstoppel. Een een buitenlandse stemmen over het Nederlandse koloniale beleid," *Bijdragen en Mededelingen betreffende de Geschiedenis der Nederlanden*, C, 663-685.
- Stengers, J. (1977), "Léopold II et le modèle colonial hollandais" , *Tijdschrift voor Geschiedenis*, XC (1977), 46-71.
- Stengers, J. (1969), "Congo Free State and the Belgian Congo before 1914" , in : Duigan/Gann (1969), 261-292.
- Van der Kemp, P. H., (1908) "De Geschiedenis van het Ontstaan der Nederlandsch- Indische Lijnwadenverordening van 1824" , *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde van Nederlandsch-Indië*, LVI, 419-76.
- Van der Kraan A. (1998), *Contest for Java Cotton Trade, 1811-40: An Episode in Anglo-Dutch Rivalry* (The University of Hull Centre for South-East Asian Studies, Occasional Paper No.32).
- Van der Kraan, A. (2004), "The Birth of the Dutch Cotton Industry" , in: Farnie/Jeremy, eds. (2004), 283—306,
- Veth, P.J. (1860), "Multatuli versus Droogstoppel, Slijmering en Co. " *De Gids*, XXIV, 58-82, 233-269.
- Wallace, A.R. (1869), *The Malay Archipelago: the Land of Oran-utan and the bird of Paradise*.

*A Narrative of Travel with Studies of Man and Nature*, unabridged republication of last revised edition. First published in 1869, New York, 1961 [邦訳 A.R. ウォレス著, 宮田彬訳『マレイ諸島: オランウータンと極楽島の国』, 東京, 新思案社, 1995年.]

- Wesseling, H.L. (1978), "The Impact of Dutch Colonialism On European Imperialism", *Papers of Dutch-Indonesian Historical Conference, Noorderwijkhout 1976*, Bureau of Indonesian Studies, Leiden-Jakarta.
- Wedderburn, D. (1878), "The Dutch in Java", *Fortnightly Review*, NS. XXIII, 96-120.

### 3. 諸外国での翻訳出版 (抄)

- *Max Havelaar, or the Coffee Auctions of the Dutch Trading Company*, translated by Baron Alphonse Nahuys, Edinburgh, Edmonston & Douglas, 1868. (Translation of Dutch First edition)
- *Max Havelaar, Or the Coffee Auctions of the Dutch Trading Company*, translated by William Siebenhaar with an Introduction by D.H. Lawrence, Slijthoff/ Heineman, Leiden- London, 1927.
- *Max Havelaar, Or the Coffee Auctions of the Dutch Trading Company*, translated with notes by Roy Edwards. Introduction by R.P. Meijer, London, Penguin Classics, 1987
  
- *Max Havelaar, ou les ventes de café de la Compagnie Commerciale des Pays-Bas* (Traduction en Français de la 4e édition, par A.J. Nieuwenhuis et Henri Crisafulli), Dentu, Paris, 1876
  
- *Max Havelaar, oder die Holländer auf Java. Zeitgemälde*, übersetzt von Theodor Stromer, Berlin, G.M.F. Müller, 1875.
- *Max Havelaar, oder die Kaffeeversteigerung der Niederländischen Handelsgesellschaft*, übersetzt von Karl Mitschke, Halle an der Saale: Verlag von Otto Hendel, [1890].
- *Max Havelaar, oder die Kaffeeversteigerung der Niederländischen Handelsgesellschaft*, Ins Deutsch übertragen von Wilhelm Spohr, Minden i. W. : J.C.C. Bruns-Verlag, 1900, 2. Aufl., 1901.
- *Max Havelaar, oder die Kaffeeversteigerung der niederländischen Handelsgesellschaft*, Ins Deutsch übertragen von Erich Stück, Berlin (DDR) Aufbau-Verlag, 1948.
- *Max Havelaar, oder die Kaffeeversteigerung der niederländischen Handelsgesellschaft*, Ins Deutsch übertragen von Wilhelm Spohr, Berlin (DDR) Verlag der Nation, 1952.
- *Max Havelaar, Oder die Kaffeeversteigerung der niederländischen Handelsgesellschaft*, Ins Deutsch übertragen von Martina den Hertog-Vogt: Verlag Bruckner & Thünker, Köln, 1993.
- *Max Havelaar, Oder die Kaffeeversteigerung der niederländischen Handelsgesellschaft*, Ins Deutsch übertragen von Martina den Hertog- Vogt: München (Ullstein- Taschenbuch 24 116) 1997.
  
- 朝倉純孝訳『蘭印に正義を叫ぶマックス・ハーフェラール』(タイムス出版社, 1942年2月)
- 佐藤弘幸訳(協力 森山幹弘)『マックス・ハーフェラール——もしくはオランダ商事会社のコーヒー競売——』(めこん社, 2003年).

## 補遺

## 1. 映画関連事項

DVD 映画 Multatuli (pseudo. Eduard DOUWES DEKKER) , *Max Havelaar, Of de koffieveilingen der Nederlandsche Handel-Maatschappij* (1860) (オランダ=インドネシア合作 1976年) 『マックス・ハーフェラール——もしくはオランダ商事会社のコーヒー競売——』使用言語：オランダ語，一部インドネシア語 (オランダ語字幕) 本日は、英語字幕 上映時間 161分

**監督** フォンス・ラーデマーケルス Fons Rademakers (1920-2007)

オランダを代表する映画監督 1958年、『川のほとりの村』Dorp aan de Rivierで監督としてデビュー  
ハリウッド最優秀外国映画賞候補 1986年、『襲撃』De Aanslagで、最優秀外国映画 アカデミー・  
ゴールデン・グラブ賞受賞

**撮影監督** ヤン・ドゥ・ボント Jan De Bont

アメリカ映画、『ダイ・ハード』(1988年)『氷の微笑』(1992)などの撮影監督を務めたのち、『スピード』(1994年)で監督としてデビュー。

**配役**

(別紙 登場人物をも参照)

マックス・ハーフェラール Max Havelaar	Peter Faber
ティーネ Tine	Sacha Bulthuis
フルブリュッヘ Verbrugge	Krijn ter Braak
スローテリング Slotering	Joop Admiraal
デュクラリー Duclari	Rutger Hauer*
スローテリング夫人 Mevrouw Slotering	Rima Melati
サイージャ Saijah	Herry Lantho
アディング Adinda	Nenny Zulaini
現地人県長 regent	E.M. Soesilaningrat

\*1982年、1982年公開の『ブレードランナー』で世界的にブレイクした。

**原作**

Multatuli (pseudo. Eduard DOUWES DEKKER) , *Max Havelaar, of de koffieveilingen der Nederlandsche Handel-Maatschappij* (1860)

**脚本** ヘラルト・スーテマン Gerard Soeteman

**受賞**

1976年 ナポリ映画祭 審査員賞

1976年 テヘラン国際映画祭 特別審査員賞

1981年 デンマーク映画批評家協会賞 (Bodil賞) 非英語最優秀作品賞

**DVD化**

2003年 A-Films ならびに『オランダ映画博物館』によりDVD化、オランダ語、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語の字幕を利用できるようになった。

**あらすじ**

冒頭、1849年のオランダ国王、ウィルヘルム三世の国会開院式演説。(後出 223頁)

1855年、植民地統治下の、オランダ領東インド (インドネシア)。若い理想に燃えるオランダ人官吏マックス・ハーフェラールが、前任者スローテリングの急死を承けて、セレベス (スラウェシ) 島メナド (マナド) から、妻ティーネ、一粒種のマックス・ジュニアールとともにジャワ島最西端バンテン理事州のルバツ

ク県都ランカスピトゥンに、副理事官として赴任する。着任を出迎える現地農民、水牛を使った耕作風景、オランダ国歌吹奏とオランダ国旗掲揚。巡回する植民地陸軍。バドゥン村の少年サイジャと少女アディンダと水牛。農民の家畜を不法に取り上げる県長やその手先の郡長の配下。

場面は一転し、1860年のアムステルダム。辞職帰国し、すっかり零落したハーフェラールは、かつてのラテン語学校の同級生でいまはコーヒー仲買のラスト商会の共同経営者として羽振りの良いドローフストッベルが帰宅〔旧市街ラウリール堀 37番地〕するところを待ち受けて自分の体験を克明に綴った膨大な手記を無理やり手渡してこれを世に出すための助力を頼む。あとでこれに目を通して驚くドローフストッベル。

さて、ふたたびルバック。それに先立つメナドでの生活の思い出。赴任途中のバイテンゾルフ（現ポゴール）の総督府。

しかし、ルバック県での現地貴族の県長やその娘婿の郡長による、無法な農民の賦役労働賦課 財産収用これを察知して県長を諫め、上司の理事官に内々に相談していた前任者は、毒を盛られた疑い あまりの無法を見かねたハーフェラールは、ついに公式に理事官に県長と郡長を告発 しかし、統治体制、そして強制栽培制度が、ジャワ全土に根を張るこれら現地有力者の協力なくして成り立たないことを知っている理事官や上層部は、それを握り潰し、かえってハーフェラールが確かな証拠もなく県長を告発したことを叱責し、彼を遠く離れたジャワ中部マデウイン理事州のガウイー Ngawi 県の副理事官に転任させる。彼は、それを拒否して依願退職、その間総督に面会して事の次第を訴えようとするが、阻まれ、即時ジャワから退去させられる。

彼の、国王の肖像への悲痛な問いかけにたいして、国王の肖像は、**賛美歌詩篇 67**（223頁）で応える。そしてアムステルダム旧市街西部地区の教会での上流市民の紳士淑女たちによるこの賛美歌斉唱で終わる

〔原作挿入 映画では若干筋を変えて省略 サイジャとアディンダの悲恋物語〕

この間、郡長に水牛を奪われ、税金が払えなくなったサイジャの父は、バイテンゾルフに出稼ぎに行くが、勝手に村を離れた廉で捕まり鞭打たれて連れ戻され死亡、サイジャは、アディンダと結婚を誓い、3年間バタヴィアに出稼ぎに行く。戻ってきた彼を待ち受けていたのは、アディンダ一家が、税金を払えぬため離村を余儀なくされていた悲劇であった。サイジャはその後を追って、小舟を必死で漕いでオランダへの反乱のまっただなかにあったスマトラ島ランブンにたどりつくが、そこで見たものは軍に惨殺され暴行された恋人の遺骸で、彼もまた鎮圧の植民地軍の手に掛かって命を落す。

## 映画登場人物一覧

### 1. マックス・ハーフェラールとその一家

マックス・ハーフェラール Max Havelaar	本物語の主人公。ジャワ島バンテン理事州のルバック県の副理事官の急死で、セレベス島メナドの副理事官からで急遽後任としてとして赴任
ティーネ Tine	その妻
マクシエ（マックス・ジュニア）Maxje	一人息子
乳母（Babu）現地人	

### 2. ルバック県オランダ人

スローテリング Slotering	急死したハーフェラールの前任者
スローテリング夫人	その妻 白人と現地人の混血でオランダ語は解しない。夫の毒殺を疑い、ハーフェラールに告げる
フルブルッヘ Verbrugge	ランカスピトゥン郡監督官
デュクラリー Duclari	東インド植民地軍の駐屯部隊指揮官
ベンセン Bensen	医師

## 3. マナドのオランダ人

コーヒー農園経営者
オランダ植民地軍中尉

## 4. ルバック県現地人支配者

県長	ラデン・アディパティの尊称を有する貴族
パラシ・クジャン Paran Kujan 郡長	ラデンの娘婿 義父の権力乱用の片棒をかつぎ、自らも積極的に権力乱用。
検察官 Jaksa	

## 5. 植民地政庁官僚

オランダ領インド総督	
ドゥ・ワール De Waal	インド評議会議員 ティーネの遠縁
ヘンドリックス Hendrix	インド評議会議員
バンタム理事州理事官	

## 6. 現地農民家族

サイジャ Saijah	パラシ・クジャン郡バドゥル村の少年
アディンダ Adinda	村の少女、サイジャの幼馴染で結婚を約束している
サイジャの父	

## 7. アムステルダム

バタース・ドローストッペル Batavus Droogstoppel (乾いた切り株 つまらない人物の意)	ハーフェラールのかつての高等中学校〔ラテン語学校〕での同級生 義父とコーヒー仲買業ラスト商会を共同経営して羽ぶりがいい。旧市街の西はズレラウリーア堀 37 番地 Lauriergracht 37 に住居と店舗を構えている。ハーフェラールが、自らの経験を描いた記録を託す。
夫人	
フリッツ (その息子)	
マリー (娘) Marietje	
ワーウェラール Wawelaar	カルヴァン派の牧師 オランダの植民地統治の使命を説教で語る

## 3. 地名対照表

オランダ語		インドネシア語	
バタヴィア	Batavia	ジャカルタ	Jakarta
バイテンゾルフ (無憂)	Buitenzorg	ボゴール	Bogor
バンタム	Bantam	バンテン	Banten
レバック	Lebak	ルバック	Lebak
パラシ・クジャン	Paran Koedjan	パラシ・クジャン	Paran Kujan
セレベス島	Cerebes	スラウェシ島	Sulawesi
メナド	Menado	マナド	Manado



5. 映画での追加

A. 冒頭

Wanneer Ik den hoogstbevredigenden toestand van geldmiddelen dankbaar erken, en overweeg, dat die grootendels de vrucht is der voordeelen door de Oost-Indische bezittingen aan het Rijk overleverd, dan besef Ik niet minder Mijne roeping om den bloei en de verdere ontwikkeling der bezittingen te bevorderen. De offers ,tot dat einde en tot handhaving van het gezag aldaar vereischt, worden met geen karige hand gebracht.

「朕は、わが国の財政取入がこのうえなく満足すべき状態にあることを感謝の念をもって認める。そして、その少なからぬ部分が、わが国家の東インド領土から上がる利益の果実によりもたらされていることを十分に熟慮している。さすれば、朕が、この領土の繁栄と発展を促進するという自らの使命をあだやおろそかに思うことは決してない。・・・この目的のため、そしてそこでの支配権を維持するためには、必要な犠牲を払うことを決して惜しんではならない。」

オランダ国王ウィルLEM三世 (1817-1890) のオランダ国会開院式挨拶演説より (1849年9月15日) De Jong (1989) ,36.にも引用。

B. 最後のハーフェラールの国王肖像へのよびかけ

「[自信を持ってお尋ねする。] はたしてこれは、あなた [国王陛下] のご意志なのか。・・・さらに海の彼方では3000万を越すあなたの臣民が、あなたの名において虐待され、搾取されているのは・・・」 (邦訳489-90頁)

C. 末尾 アムステルダムのカルヴァン派 (改革派) 教会での上流市民による賛美歌斉唱 (原作にはない) 詩篇67 一番～三番

(旧)899 詩 編 67. 1-68. 7

67

1 神がわたしたちを養ひ、祝福し  
御領の輝きを  
わたしたちに向けてくださいますように  
あなたをこの地が知り  
御救いをすべての民が知るために。

2 神がわたしたちを養ひ、祝福し  
御領の輝きを  
わたしたちに向けてくださいますように  
あなたをこの地が知り  
御救いをすべての民が知るために。

3 あなたをこの地が知り  
御救いをすべての民が知るために。

4 神よ、すべての民が  
あなたに感謝をささげますように。  
すべての民が、こそって  
あなたに感謝をささげますように。

5 諸国の民が喜び祝い、喜び歌いますように  
あなたがすべての民を公平に裁き  
この地において諸国の民を導かれることを。

6 神よ、すべての民が  
あなたに感謝をささげますように。  
すべての民が、こそって  
あなたに感謝をささげますように。

7 大地は作物を養わせました。  
大地は作物を養わせました。

8 神がわたしたちを祝福してください  
神がわたしたちを祝福してください  
地の果てに至るまで  
すべてのものが神を畏れ敬いますように。

神よ、わたしたちの神が  
わたしたちを祝福してください  
神がわたしたちを祝福してください  
地の果てに至るまで  
すべてのものが神を畏れ敬いますように。

日本聖書協会 共同新訳『聖書』

PSALM 67  
1544 Louis Bourgeois (上)

1. D'al-goe-de God zij ons ge-na-  
en ze-gen' ons met o-ver-vloer  
Hij doe zijn aan-ge-zicht ge-sta-  
ons lich-ten en Hij zij ons goe  
Op-dat elk ge-ne-gen  
zich aan u-we we-gen  
op deez' aar-de wenn'  
en de blin-de hei-den,  
nu van God ge-schei-den,  
oens uw heil er-kenn'.

2. De volken zullen U belijden,  
o God, U loven al te zaal'  
De landen zullen zich verblijden  
en juichen over uwen naam.  
Volken zult Gij recht,  
hunne zaak bekechten  
in rechtmaaiheid,  
volken op deez' aarde,  
die uw arm vergaarde,  
die Gij veilig leidt.

3. De volken zullen, Heer, U loven,  
o Heer, U loven altemaal,  
die d'aarde vruchtbaar maakt van  
dat z' ons op haar gewas onthas  
God is ons geseegen,  
onze God geeft zegen,  
Hij, die alles geeft,  
Hij zal zijn geprezen,  
Hem zal alles vrezen,